

三つの『三世のなみ』：成島信遍家集の成立

久保田，啓一
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/10469>

出版情報：文献探究. 15, pp.10-19, 1985-02-25. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

三つの日三世のなみ

—成島信遍家集の成立—

久保田啓一

二

宝暦十年九月十九日、成島信遍は七十二歳の生涯を閉じた。冷泉為綱、為久、為村の三代に和歌を学び、自らも田澤義章、池上幸政、長谷川安卿、坂本栄昌、楠子和鼎その他に詠作指導をするなど、江戸冷泉門の成立発展に大きく関わった大立物とでも言うべき存在であった。信遍以後の成島家が江戸冷泉門の一つの拠点として機能し、また和鼎、勝雄、司直、良讓、柳北と五代にわたって家の学として和歌が重んじられたのは、ひとえに信遍の働きに依るところが大きく、信遍の築き上げた家学を盛りたてて行くこととする努力のあらわれであった。このように成島信遍は享保以後の幕府を中心とする江戸の雅文壇の動向をさぐる上で欠かせない人物なのであるが、末裔の柳北こそ注目を浴びることはあれ、信遍に関しては未だ十分な研究が成されているとは言えない。ここにとり上げる所以である。信遍の文集観・学問観や江戸歌壇における位置、及び伝記的事項の検討などは別の機会にゆずり、本稿では伝存する信遍の詠草類教種をとり上げ、成島家における信遍詠草の継承の実態を家集の成立過程を通して推測することを第一の課題とする。

尚、本稿は本誌第十三号に掲載した「九州大学萩野文庫蔵成島信遍集」——翻刻と解題——の補訂も目的とする。御参照いただければ幸いである。

信遍の没した翌年、宝暦十一年十一月に和鼎は「三世のなみ」と題した父の遺草をまとめている。内閣文庫蔵本の本文に依り、和鼎の奥書を左に引いてみよう。

這集を題して三代のなみといふは先年宗匠家、為村卿より門葉の芳栄也三代の點削の歌とも書てまいらすへきとありし比亡父信遍書て奉られし名なりいま又三代の間誠に褒詞ありし和歌を集めたればその舊名に因て題すといふ

宝暦十一年巳霜月

源和鼎録

「三世のなみ」(奥書には「三代のなみ」とあるが、「三世」と「三代」に本質的な違いはないと思われるので、原文の引用の時以外は表記を「三世のなみ」に統一する)という命名の由来と本集の成立事情を端的に物語る文章である。「先年」、為村卿から冷泉家三代(為綱、為久、為村)の添削の歌を奉るよう命じられて信遍がとりまとめたのが「三世のなみ」であり、その「旧名」にちなんで和鼎は自分の編集した父の遺草にも同じ「三世のなみ」を書名として付けたのである。つまり、信遍自身が編んで為村に奉呈した第一の「三世のなみ」と、信遍の死後和鼎が編んだ第二の「三世のなみ」の二つが成立していたことになる。

このうち、宝暦十一年成立の第二の「三世のなみ」は、管見に入るところでは二本伝存する。すなわち、内閣文庫蔵本と大阪市立大学附属図書館森文庫蔵本の二本である。総歌数三百九十八。うち、

為久の返歌二首、信遍の妻の歌一首、為村の返歌一首、それと巻末の為村による信遍追悼歌三十二首を含み、信遍自身の詠歌は三百六十二首収められている。信遍の家集としては最も規模が大きくまとまったもので、伝記資料も豊富である。内閣文庫本と大阪市大本とは歌の字句に少く異同がある。また、大阪市大本では冷泉家三代の添書の歌にそれぞれ為綱、為久、為村の名が明記されるのに対し、内閣文庫本では省略されたものがあるなど、書写系統は同一ではないが、いずれも和鼎自ら編集した原本に遡ることは間違いない。『甲子夜話』巻百や『国書解題』が言及しているのは、この第二の『三世のなみ』である。

一方、書名の由来からいけば、むしろ正統たるべき第一の『三世のなみ』とは如何なるものなのか。伝本が稀なためかほとんど目に触れられることなく言及もされなかった。しかるに、九州大学附属図書館森野由之旧蔵本中に『成島信遍集』と仮題を附された写本を見出し、検討の結果まさしく第一の『三世のなみ』に該当することが判明した。詳細は本誌第十三号掲載の翻刻と解題を参照されたい。本書の成立事情は、『三世のなみ』三代御点詠草にそへて奉しことは、の中で信遍自身によって語られる。かなりの長文であるので本文の引用は十三号の翻刻に譲り、概略のみを以下に記す。

冷泉家に入門したのは享保四年のことで、今から二十七年前である。それから歳月は流れ、自分も年老いた。昔のことをあれこれ思い出して語るのはいかにもないが、言わぬとまたすつきりしない。つたない自分の歌を貴い御家にお見せするのは恥ずかしいが、私ごとき者が今のような幸せを得られた喜びは、私以外に伝える人がいない。四十年ほど前、為久卿が
ともしやす賤に此ころきかせはやいまこむ秋のよおしかのこ

という歌を詠まれた。そのころ、私は宗匠家の指導を受けたいと念じていたが、もとより実現するはずもなく、仕方なしに仲間達とつどって真似事をやっていた。そんな私の希望が上様のお耳に入り、ちやうど関東に下向して来られた為綱卿への入門を勧めて下さった。高家の仲介により入門を許されて親しく指導を受けたが、思いがけず為綱卿が薨せられ、続いて為久卿に師事することになった。伝奏として下向されるたびに教えを受けたが、この卿も急逝され、添削を受けた二、三千首の歌を秘め置くことだけが卿をしのぶよすがとなった。今年延享三年の五月待つころ、為村卿が下向され、『三世の波かけさせ給ふもくすともかきつめて奉れ』と御命じになった。そこで、『百首二つ斗にそへて三世のなみと題しかの御家』に奉るのである。

延享丙寅（三年）秋八月 源信遍

この三代添削の詠草が『三世のなみ』と名づけられたことがわかる。延享三年四月（十三号の解題で五月としたのは、『五月待つ』という部分を読みかえたためである）に冷泉為村が下向し、信遍たち関東冷泉門人と初めて対面した。当座の会では信遍が

和歌の浦やみるめさかるも海士衣かさねし代々の患とそしる
と先々代からの御恩を謝したのに対し、為村が、

三代かけてみるめさかるも波ならぬ契りとそ思ふわかりの浦人と返歌を詠んでいる。これ以後、当代随一の和歌の名匠為村の指導を受け、新に集まった門人を吸収し、江戸冷泉門はさらに発展していく。信遍より一世代あとの和鼎、石野広通、長谷川安卿、官部義正などが活躍した時期に江戸冷泉門は全盛を迎えるが、そのきっかけとなったのが延享三年の為村下向であった。その為村が三代の点取和歌を関東門人に提出させたのは、父祖以来の指導の愛情

を把握し、更なる冷泉門の拡大を期したからであらう。

信遍が為村に奉った『三世のなみ』は、為久卿御点の歌百五十五首を中心に、為綱卿御点歌三十七首、為村卿御点歌二十七首をあわせ都合二百十九首を収める。『成島信遍集』が仮題にすぎず、本来の書名が『三世のなみ』だったことは、十三号掲載の解題に述べた通りである。

三

第一、第二の『三世のなみ』の存在はこれで確認できたと思う。

ところがこの二つ以外に別系統の『三世のなみ』が伝存する。福井久蔵氏の『大日本歌書綜覧』に記載のある無窮会図書館神習文庫の井上頼園旧蔵本と、三康図書館蔵『信遍詠藻』がそれに該当する（『信遍詠藻』は松野陽一氏の御教示による）。神習文庫本は中本一冊の写本。表紙左肩に、『三代のなみ』と墨書される。墨付三十丁。斎藤縣麻呂が文化十三年七月に金子春道の所蔵本を借覽して写した旨の奥書がある。

こは鳴嶋信遍のうし冷泉為久為綱為村の三の卿に点削をうけま
いらせたりしによりかくは三代のなみとは名つけつるなめり
ことし文化十あまり三とせ文月の末金子春道か家にひめ置ぬる
をかりいて、サてうつしつるなり

藤原縣麻呂誌

三康図書館蔵本は大本一冊。墨付二十六丁。『狂歌堂文庫』の蔵書印により鹿都部真頼の旧蔵本であったことが知られる。表紙の題簽には、『信遍詠藻』為綱卿御判とあるが、これは表紙とも後人が補ったものである。内容からいくと、『為久卿御判』とあってしかるべきところで、内容を正確に把握していない人間であつたらしい。又、

表表紙見返しうに、『三代のなみ 信遍』という文字が透けて見え、表表紙には、『三代のなみ』という書名が墨書されていたことがわかる。

神習文庫本、三康図書館本ともに歌教は百一。冒頭の信遍の前書きに引用されている、為綱から褒詞を受けた二首を含めての教で、残りは為久卿為村卿御点の詠草である。三康図書館本の本文に従って信遍の前書きを次に掲げる（私に句詠点、濁点を施した）。

照射せずしづにこのころきかせばや今こむ秋のさをしかのこ
え

是は冷泉為久卿まだわかうおはしませし比よませ給ふ歌とてせ
にいひさはぐ事の侍りしを、そのころ伝えうけ給はりて何とな
く身にしみおほえけるが、哀一たびこの道のしをりをたのみま
いらせばやとねぎ侍りしほどに、享保のはじめ、父の卿下向ま
しませしをはからずもおほけなき御前に聞えあげて、冷泉のま
できたるに道のしるべうけつげとかしこき仰ごあり。殿上の
間にして中條大和守朝臣、畠山下つふさのかみ朝臣そのむねを
執達あり。めしいで、ゆり給ひし其夕伝奏旅館に候じ、はじめ
て詠草たてまつりぬ。時に廿八歳也。詠草の内

為綱卿 述懐

おほけなきめぐみの露とあふぐ哉雲井の月の影をやどして

忍恋

したもえの思ひのけむりいつまでかよそにしのぶのうらのあ
ま

右二首よろしきよしを仰す。ことりのつみぞに、歌は利根なるよ
りはぬぬめりとしたるかよきと雲上勅ありなど、申もかたじけ
なき御ことなごうけ給りき。幾ほとなくくれさせ給ひしかば、

又為久卿につきて此道のしるべをうかひ侍りぬ。信遍

為綱へ入門したのは二十八歳のときである。信遍は言うが、二十八歳の享保元年には冷泉為綱は下向していないし、吉宗も八月に將軍職についたばかりで、信遍が特に目とかけられて入門を勧められることなど考えられない頃である。二十八歳入門は信遍の記憶違ひであろう。九大本『成島信遍集』の伝える享保四年説もあるが、為綱の下向を考え合わせると『寛政重修諸家譜』等のいう享保五年入門が事實に近いと思われる。為久の「照射す」の歌は九大本『成島信遍集』の「三代御点詠草にそへて奉しことは」にも引かれており、冷泉家入門を渴望していた信遍にとって誠に印象的な歌であつたらしい。以下、為久卿御点の歌三十三首、為村卿御点の歌六十七首が続く。この百一首は内閣文庫本系の第二の「三世のなみ」にほぼ全部含まれるが、ごくわずかながら例外もある。両系統の比較は後に述べるが、ともかくこれで「三世のなみ」の書名を持つ信遍の家集に三系統あることが確認できるのである。

四

成島家には、信遍に限らず江戸冷泉門の主だった歌人たちの、宗匠家から褒詞を受けた詠草を書きこめた草稿類が残されていた。それを信遍の弟子津村正恭が借覧して写したのが、宮内庁書陵部蔵『片五集』後集卷七十九・八十所収の「冷泉家御褒詞詠藻」である。卷八十の巻末にある正恭の跋文を掲げる。

此一帖は成嶋和鼎ぬしとし比宗匠家門人の歌に褒詞ありしを書あつめひめときたるを、こひ出てうつしたるなり。先師成嶋信

遍老人は彼三世の門人にして、為綱卿よりこのかたあまたの褒詞あれば、此歌をも書くはふるつるで、和鼎ぬしの歌をはじめかたはうこれにもれたる同門の人々の歌をも尋もめて書くはふる事とは成ぬ。はた、これにみづからうの歌を書くはふる事、をこなるしわざながら、撰集のふるきたれしもあれば、褒詞をえたる愚詠をば書そへつ。此帖の中、為村卿の褒詞ありし歌ことにおほければ、それをばた褒詞の言のはのみを書そへ、為綱卿為久卿褒詞の歌は、その比の門人先師の外おほく聞えざれば、此二方の褒詞をば御名をしるしてわかつ事となせり。今の宗匠為泰卿もことさらに褒詞を給へる歌はすくなければ、これをも事のわかちやすきがために御名をしるしつ、春秋恋雑を部類して二巻とはなしぬるになん。涼庵藤原正恭しるす。

(句詠点、濁点は松に施した)

春、夏、秋、冬、恋、雑の六部にわからず、千数百首に及ぶ一門の点取和歌を配列した本集は、江戸冷泉門における成島家の位置を物語る資料として誠に重要である。このうち、信遍の詠歌は百八十三首、配列は題形式をとっており、冷泉家三代それぞれ御点歌ごとにまとめて編集した「三世のなみ」とはおのずと異なつた形式となつている。例えば、為久と為村によつて添削を受けた全く別の歌でも題が同じであれば一くりにするといった具合である。しかし、収録歌そのものの大半はやはり「三世のなみ」と共通する。

以上に掲げた信遍の和歌を多く収録する四種の歌集、すなわち三つの「三世のなみ」と「冷泉家御褒詞詠藻」と互いに重ね合わせるにより、成島家での信遍遺草の編集過程がある程度推測できると思われるので、その作業の結果を表で示すことにする。なお、

信遍の和歌は、宝暦六年成立の岡田忠篤編『千首和歌』や石野広通の『霞閣集』などにも収められるが、歌数も少なく、三つの「三世

のなみちや「冷泉家御褒詞詠藻」との比較はあまり意味を成さない
のでここでは省略する。

対照表の掲出に先立って、若干説明を加えておく。上段の番号は
内閣文庫本「三世のなみち」収録歌に附した通し番号である。その下
にそれぞれ和歌の題や詞書を記す。そのままの引用は「」に入れ、
詞書が長い場合は大よその内容を略記する。その下の欄は、内閣本
系（大阪市大本も含む）と三康本系（神智文庫本も含む）に共通す
る和歌を、三康本所収歌の通し番号で示した。対照の基準を内閣本
においているため、内閣本になくて三康本にのみある和歌の番号は
欠番となる。次が「冷泉家御褒詞詠藻」との対照。「雑」「恋」「
夏」などは「冷泉家御褒詞詠藻」の部立、下の数字は抄出した信遍
の詠歌百八十三首に附した通し番号である。最後に九大本「成島信
遍集」（私にいうところの第一の「三世のなみち」との比較。番号
は「成島信遍集」二百十九首の通し番号。内閣本所収歌と重なるも
のを挙げた。比較の過程で特に注意を要するところは表のあとに注
記しておいた。

4	3	為久卿御褒詞之歌	内閣文庫本 歌題 詞書	本号 康番 冷泉家御褒詞詠藻
「池藤」	「秋恋」			
3	3	為綱卿御褒詞之歌	三歌	康番 冷泉家御褒詞詠藻
春 30 61	恋 76			
	2	為久卿御褒詞之歌	歌題 詞書	本号 康番 冷泉家御褒詞詠藻
	「忍恋」			
	2	為綱卿御褒詞之歌	三歌	康番 冷泉家御褒詞詠藻
	「述懐」			
	1	為久卿御褒詞之歌	歌題 詞書	本号 康番 冷泉家御褒詞詠藻
	「忍恋」			
	1	為綱卿御褒詞之歌	三歌	康番 冷泉家御褒詞詠藻
	「忍恋」			

13	12	11	10	9	8	7	6	5
「寄鐘恋」	「上陽人」	「寄草恋」	「恋衣恋」	「恋衣恋」	「名所海」 ⁽²⁾	「寄松恋」 ⁽¹⁾	「寄山恋」	「禁中月」
12	11	10	9	8	7	6	5	4
恋 86 169	雑 174 187	恋 81 166	恋 73 153	恋 83 172	雑 173 183	恋 82 164	恋 80 160	秋 50 100

42	41	為村卿御褒詞之歌	39	37	36	35	34	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
「春月」	「對月言志」		春の御舟献上	隅田川遊覧随行	「寄書恋」	火事後の雪	飛鳥山酒宴	為久返歌 ⁽²⁾	御家伝古今の宮	為久返歌	御家伝秘注の宮	起服の仰こと	涙の露の藤衣	秋の歎き	巨勢氏への返歌 ⁽²⁾	鳥辺山の煙	世は露のごとく	養母死去反歌	養母死去長歌	日光詣不参加	「後朝恋」	「擣衣」	「松藤」 ⁽⁴⁾	「郭公」	「月前擣衣」 ⁽³⁾	「月前幽情」
37	36		25	23	23	20	21					34	33	32	31	30	29	28	27	19	18	17	16	15	14	13
春 10	秋 52		春 32,33	恋 84	春 6	春 15,16	雑 175				雑 183	雑 182	雑 181	雑 180	雑 179	雑 178	雑 177	雑 176	雑 172	恋 71	秋 54	春 31	夏 38	秋 55	秋 53	
			168																	143	111	59	74	112	104	

92	91	90	89	88	86	85	83	73	63	62	61	60	59	58	57	56	55	52	51	50	49	48	46	45	44	43	
「閑居」	「初秋風」	「郭公」	「初春鶯」	「早春山」	「野雪」 ⁽⁷⁾	「寄硯恋」	「寄枕雑」	「山家よめる」	「田家よめる」	「述懐」	「雪」	「月」	「郭公」	「花」	「山家水」 ⁽¹⁾	「水上堂」 ⁽⁷⁾	「水」	「栽花」	「老」	「懐旧」	「老人對鏡」	「秋夕」	「春望」	「月前扁舟」	「尋虫聲」	「水辺梅」	
88	87	86	85	84	78	83	81	66	58	57	56	55	53	54	52	51	50	49	47	46	45	44	43	41	40	39	38
雑 88	秋 45	夏 39	春 4	春 5	冬 67	恋 85	雑 82	雑 67	雑 67	雑 121	冬 64	秋 49	夏 37	春 14	雑 171	夏 43	雑 87	春 25,27	雑 46	雑 140	雑 143	秋 48	春 34,35	秋 51	秋 46	春 7	

(6) 「冷泉家御褒詞詠藻」雑175の次に収録。

(7) 「冷泉家御褒詞詠藻」では、褒詞「よろしく候」を為久のものとする。

(8) 「冷泉家御褒詞詠藻」雑171以降は追加分、追加の大半が信通の詠。

(9) 三康本80、「冷泉家御褒詞詠藻」冬66ともに題は「山初雪」。

(10) 三康本79、「冷泉家御褒詞詠藻」冬65は内閣本になし。

五

諸集の対照は以上である。内閣本系、三康本系、および「冷泉家御褒詞詠藻」は互いに共通する部分が多いのに対し、所謂第一の「三世のなみ」と目される九大本「成島信通集」が全く性格を異にしていることが一目瞭然である。そこでまず、内閣本系、三康本系、「冷泉家御褒詞詠藻」相互の共通点と相違点に注目しながら比較検討してみることにする。

内閣本と三康本の歌の配列を見ると、為久御褒詞の歌で四番の「池藤」から二十番の「日光詣不参加」まで、二十一番の「養母死去長歌」から二十八番の「起服の仰ごと」まで、為村御褒詞の歌で四十一番「對月言志」から八十二番「山家をよめる」まで、八十八番「早春山」から九十四番「私亭会離卯花」までが一致している(歌番号は内閣本の通し番号)。多分、成島家蔵の原草稿の配列が両系統の一致部分に面影を残しているのであろう。

もっとも、以上四つのグループの前後には、内閣本系と三康本系で異なる歌が配置されていて、全体を通じての配列にはかなりの違いがある。内閣本系は単に三康本系に増補分をつけ加えたものでは

ない。その根拠として、内閣本系にはなくて三康本系にはある二首の歌が挙げられる。対照表を通覧していくと、三康本の通し番号のうち七十九番と九十八番が欠けていることに気づく。まず七十九番前後の歌を左に掲げる。

野雪

78 むさし野はふしにフ、きて白妙の雪の外なる山のはもみす

山初雪

77 昨日までしくる、雲のおこま山はれてけさみる峯の初雪

80 あしかきのよし野の山にふりそめてまたひとへなるけさの初雪

この三康本の七十八番、八十番が内閣本では「野雪」として収められている。

野雪

86 武さしのは富士につ、きて白妙の雪の外なる山のはそなき

87 あし垣のよしの、山に降そめてまたひとへなるけさのしら雪

傍点を附した部分に異同がある。ちなみに「冷泉家御褒詞詠藻」でも、「山初雪」の題で「昨日まで」の歌と「あしかきの……けさの初雪」の歌が並び、「野雪」の題で「むさし野は……山のはそなき」の歌が置かれている。石野広通の「霞閣集」巻四冬にも「山初雪」の題で「あしかきの……けさの初雪」として入集している。つまり、「あしかきの」の歌は内閣本以外すべて「山初雪」の題で、結局は「けさの初雪」の形をとるのである。

歌の内容からいって、「あしかきの」の歌はその前の「昨日まで」の歌と対になるべきものである。生駒山と吉野山の初雪を詠んだ歌

として、題は「野雪」ではなく「山初雪」の方がふさわしく、結句は「峯の初雪」「けさの初雪」とあってしかるべきである。おそろく原拠となった成島家蔵の草稿でもそうなっていたのであろう。ところが信遍の死後、宝暦十一年に和鼎が第二の「ヨ三世のなみ」を編纂する際に、「山初雪」二首のうち生駒山の歌をうっかり落としてしまい、その前の「野雪」の歌に続けてしまったのである。津村正恭が「冷泉家御褒詞詠藻」を編んだときは、和鼎編の「ヨ三世のなみ」に依らず、成島家蔵の原草稿にあたってたと思われる。故に「あしかきの」の歌は「昨日まで」の歌とともに「山初雪」として収められたのである。

和鼎が「うっかり生駒山の歌を「野雪」の題に収めたとき、結句が「けさの初雪」「けさの白雪」のいずれであったかは今となっては知るよしもない。ただ、同じ内閣本系でも大阪市立大学蔵文庫本では結句が「今朝の初雪」とあり、「初」の字の右に「白か」と傍書がある。大阪市大本の書写者は、題の「野雪」と結句の「けさの初雪」の微妙な齟齬に疑問を抱き、内閣本と同じ「けさの白雪」の本文をもつ他本を参照したかして「白か」と傍書したのであろう。大阪市大本の存在は、和鼎の編纂時には「あしかきの」の歌の結句が「けさの初雪」であった可能性も示唆する。「初雪」から「白雪」への改竄は、宗匠家の漆削によるのではなく、幾度かの書写を経る過程で生じたのかもしれない。

次に、もう一首の九十八番の歌について述べておく。三原本と神習文庫本に異同は全くない。三原本の本文に従って左に掲げる。

比一葉にすみのつかさることを跡にみいて、

98 かきたえし浪の藻芥はこころなきききはあまのしわざとをみよ

他の歌と比べて異例なのは、上句と下句を半丁ずつに分けて書いてあることである。三原本では二十四丁ウに詞書と上句、二十五丁オに下句が書かれている。詞書にある通り、一丁分の空白を埋めるために記された歌なのであった。これが和鼎編の「ヨ三世のなみ」や「冷泉家御褒詞詠藻」に収められなかったのは、宗匠家の褒詞を受けた歌ではなく、あくまでも信遍が一葉の空白を埋めるべく書き足した歌だったからであろう。してみると、三原本と神習文庫の原本は信遍の手控えのようなものだったのかもしれない。

内閣本に欠ける三原本七十九番及び九十八番の二首の検討により、三原本系が内閣本系とは別に成島家蔵の原草稿から抄出され成立したことが明らかとなった。西系統の先後は、収録歌の成立時期を考証することによって推測できる。内閣本系が宝暦十一年の成立であることは言うまでもない。では三原本系はいつ頃成立したのか。百一首のうち詠作時期の確定されるものを拾っていくと、一番おそいのは宝暦元年の歳暮である（三原本の通し番号九十六）。それと、三原本系にはなくて内閣本系には収められる宝暦四年の為綱三十三回忌「春懐旧」三十三首（百十四〜百四十六番）を考え合わせると、ほぼ宝暦二、三年頃の成立と思われれる。

確かに三原本系に含まれない内閣本系所収歌は、信遍のごく晩年の作を無雑作に拾い集めたものと言ってよい。その中心を占めるのは、宝暦六年の娘ゆき、こゝろ、嫁、孫の相づく死去にまつわる悲歌の連作（内閣本通し番号二百六十三〜二百九十）である。内閣本系と「冷泉家御褒詞詠藻」は、三原本系よりもっと重なり合う部分が多いのであるが、宝暦六年の肉親の死を詠じた連作はすっぽりと抜けている。宝暦七年の五十三歳官勤の歌（春一〜三）や宝暦八年十二月十八日の和鼎転職を祝う歌（雑百六十三、百六十四）などを収め、何よりも跋文の中で信遍を「先師」と呼んでいるのだから、

「冷泉家御褒詞詠藻」が宝暦六年よりも後に成立しているのは確か
で、正恭は信遍の慟哭の連作を成島家蔵の原草稿で見ているはずな
のであるが、「冷泉家御褒詞詠藻」には収めなかった。内閣本によ
ると、連作最後の二百九十番のあとに為村が、

老の身のうきことおほき哀々にそへんことはもなく／＼そみつ
という歌を添書している。「御褒詞」ではないかもしれないが、「
冷泉家御褒詞詠藻」に入れる資格は十分にある。それでもなお正恭
は抄出しなかった。あまりにも悲痛な信遍のなげきぶりに思わず筆
を控えたのであろう。ゆき、この追悼文「ゆき女の行状」梅崎
めたまの記は、謄写本として東京大学史料編纂所に伝わる「芙蓉
楼全集」の中に収められている。

宝暦二、三年頃までの信遍の手控えとして三康本系が原草稿から
派生した。宝暦十年の信遍の死後、十一年に知鼎は父の遺草をまと
め、「三世のなみ」と題した。又、同じ原草稿をもとにして類題形
式で信遍を含む江戸冷泉門の秀歌撰「冷泉家御褒詞詠藻」を編んだ
のが津村正恭であった。

残念ながら、この三点の原拠となったと思われる草稿類は伝存し
ていない。友野霞舟の「錦天山房詩話」には、

錦江著撰甚夥、祭酒林公與其孫司直邦之善、余欽介林公借鈔其
遺集、未果、客歲其家不戒火、悉付煨燼、可勝歎哉

とある。成島家は司直の代に火災をおこし、信遍の尠大な詩文和歌
和文の草稿は灰燼に帰してしまったのである。新見正路が文政年間
に和文を抄出したものがかろうじて「芙蓉楼全集」として伝わって
いる。原草稿は今や幻と化し、派生した内閣本系と三康本系の「三
世のなみ」正恭の「冷泉家御褒詞詠藻」は、共通の祖の面影を強
く残しながら互いに関わり合いつつ各々の個性を見せている。

六

一方、延享三年八月に信遍が為村に奉呈した第一の「三世のなみ」
はどうなったのか。九大本「成島信遍集」の巻頭に、

是は為村卿より門下の人々に百首ばかり故大納言どの御点の歌
かきてまいらせよと侍し、信遍三世の思波に浴して点のうた二
三千首に及べり、点取のうた半二百首斗には趣侍りしま、これ
を書てたてまつりし草稿なり。

(句読点、濁点は私に施した)

という前書があり、成島家に草稿が伝わっていたのは確かである。
それを浄書したのが源勝雄であった。十三号の翻刻と重複するが、
「成島信遍集」巻末の勝雄の後語を引く。

長月十日あまり、九日、晚ふかき山がらす、さやけき月にをくれ奉し
より、はや七年の秋になん。初時雨ふりにしかたをおもひつゝ
くれば、わがまだいとあへかなるほどにて、年月をかやぬるま
ゝに物の心やう／＼思ひしらるゝにぞ、伊勢のうみ千尋のそゝ
のふかきおしへ、かしこかりし事どもさま／＼思ひあつめられ
我たらちねのしたいくものし給ひしを、など昔おぼしていま、
らいと露けい、言の葉の露消給ひぬるのちも猶かの光はうせす
なむ。其影によりてこそ、夕やみのたど／＼しきもふみたがへぬ
道のしるべとはなりき。されば深き御めぐみをうけたてまつる
を、なに／＼つけてかむくひはべるべき。かゝるおりにぞ、たか
うおほくもたらむは佛つくり僧に物ほどこし、心のまゝに心を
こなふべし。かうやうの手向は及ぶべくもあらず。また、やこえ
あらんきは、自も誦経し文つくり、心あるあたりには哀なるこゝ

このはにかしき心をばへ侍るべけれど、これも悪なる身におはぬそしりかへりみせうれて口をこぢめぬ。いかでかはかぐしからぬ事なりともしいで、心ばかりの意向をせばやと思ひぐしたるに、いませし昔三代のめぐみのなみかけさせ給ひける言の葉かきつめ給ひしをうつしてよと、かの御跡にあたり給ひ和鼎のぬしのこひ給ふに、夏の、鹿のつかみじかき筆に春のはなのかぐはしきこのはごもをあさましく書なさいむはうたてつみ多き業なるべけれど、またいなみ侍らんもかへりてほいにやそむき侍らんかし。今は文字の中かみかたくななるもはぢうはず、且は我ころの露ばかりの意向にもと、をしまづきにうちむかふもうれしきものから、かへす、つみうへけんかし。和歌のうらにめぐみのなみを三世かけしたまもはかくも光ことなる

また類なみの玉もはあまの子の業にかくべきものとしもなし
源勝雄しるす
(句詠点、傍点、濁点を私に施した)

信遍の七回忌の年といえは明和三年。実父と信遍の親交を思い出して涙ぐむ勝雄は、信遍の嫡子知鼎から「いませし昔三代のめぐみのなみかけさせ給ひける言の葉かきつめ給ひしをうつしてよ」と依頼され、不才の身ながら何よりの供養とひきうけたのである。源勝雄といえは、和鼎の子成島勝雄に思い至るのは当然だが、この後語の記述からは和鼎と勝雄の親子関係を引き出すことはできない。勝雄が和鼎の子になる以前でなければ後語の内容と矛盾してしまふ。

勝雄は和鼎の養子であった。内閣文庫蔵『諸家系譜』では次のように勝雄(後峰雄と改名)が説明されている。

峰雄 仙蔵 字叔飛

養母 田安組頭 中山忠左衛門政任女

実父 奥向同朋格 北角久球勝有次男

実母 瑞春院様御侍 星野長兵衛女

寛延元年八月十五日江戸出生

明和五年十二月十六日右仙蔵義統者無御座候へ共賀養子仕

義段奉願候同大正五年三月廿日賀養子被仰付候加納遠江守殿

被仰渡(以下略)

勝雄の実父北角久球勝有が奥坊主、御同朋格を歴任しながら医師としても知られた存在であったことは、『有徳院殿御実紀附録』巻十五の中の記事で明らかである。まさに信遍とは同僚であったのである。二人は『成島信遍集』の後語が伝える通りの親交を結んでいたのだろう。又、勝雄自身も信遍に歌の指導を受けていたらしい。そんなこともあって勝雄は詠草の浄書を引きうけたのである。この時和鼎と勝雄はまだ親子ではなかった。養子縁組が成立するのは明和六年三月二十日。勝雄が第一の『三世のなみ』を書写した三年後のことである。

九州大学大学院修士課程

附記

本稿を成すにあたり、資料の閲覧、複写をお許し下さった国立公文書館内閣文庫、三原図書館、無窮会図書館、大阪市立大学附属図書館、宮内庁書陵部、東京大学史料編纂所、九州大学附属図書館、種々御教示を賜った松野陽一氏、上野洋三氏に対し心より御礼申し上げます。

〈十三号翻刻訂正〉 P17「オ、侍りしまし」↓「侍りしまし」

P22 109「萩」↓「萩」川「関」↓「関」 P23 143「契」↓「現」

P24 153「他」↓「化」「言ひし」↓「みてし」 166「佛」↓「佛」